

## 第2章 水源地域周辺の現状と課題の整理

### 2-1 水源地域周辺の現況を示すキーワードと情報の整理




#### 2-1-1 水源地域周辺の特徴

水源地域には、かつて、13の集落があったが、現在では横川ダム計画前に移転した滝、高野、赤沢、豆納、さらに横川ダム建設水没地にあたる市野々、下叶水が移転して7集落となった。しかし、水源地域周辺には、かつて集落があった名残や、地域文化も残されており、地域の歴史を含めて横川ダム工事事務所による「ふるさとへの想い」に詳細がまとめられている。






また、ダム事業着手以前に、東部地区の8集落が一致団結してまちづくり活動を展開し、農林水産祭の「むらづくり部門」で天皇杯を受賞したことを記念して発行された「東部地区のむらづくり」に当時の東部地区の状況や、子供たちの夢などがまとめられている。

ここでは、これらの資料や既存の調査資料等を基にして、歴史的な流れの中における現在の水源地域周辺である東部地区の特徴を、キーワードを抽出する方法で整理を行った。

表 2-1 水源地域周辺の特徴

区分	キーワード等	概要
自然環境	山地面積	<p>東部地区に沼沢と白子沢を加えた旧津川村の面積集計データによると、総面積約19,600haのうち山林率は93.7%を占めている。</p> <p>横川ダム堤体側から上流域の集落を望む。山地に囲まれて農地面積も少ない。(横川ダム完成予想CG写真:「YOKOKAWA DAM 2006」より)→</p> 
	豪雪	<p>典型的な日本海型気候で、全国でも屈指の豪雪地帯。11月中旬には初雪が降り、最大積雪深は時に5mに達し根雪期間は5ヶ月以上に及ぶ。</p> <p>冬の積雪状況(河原角)→</p> 
	飯豊山	<p>飯豊山系の北側山麓に位置し、地蔵岳に源を発する横川、大石沢川に沿って集落が点在する。</p> <p>飯豊連峰を望む →</p> 

	市野々十二景	<p>市野々には「市野々十二景古絵図」があり、自然の情景が季節や時間との関連で詩的に表現されている。</p> <p>市野々十二景古絵図（横川ダム工事事務所：「横川ふるさとへの想い」より）</p>	
	<p>かじか滝</p> <p>不動滝 白滝 （滝街道の三名滝）</p>	<p>横川の最上流部にある滝で、かじかが滝の岩登りをすることで有名。それに合わせたかじか捕りの珍しい漁法もある。</p> <p>不動滝、白滝を加えて、滝街道の三名滝とも呼ばれる。</p> <p>かじか滝 →</p>	
	ブナ林	<p>権沢入の一部にブナの天然林が残っており、国有林で大石沢ブナ保護林に指定して保護している。</p> <p>ブナ天然林が残る。大石沢ブナ保護林 →</p>	
歴史・文化環境	遺跡	<p>豆納遺跡（縄文後期）、赤沢遺跡、胡桃平遺跡、河原角遺跡（縄文中・後期）、向原遺跡（縄文後期）、千野遺跡（縄文早期後半から中期）の遺跡群がある。中でも向原遺跡はダムに沈むため、最近まで発掘が続けられ、土偶や土器、矢じりなど多くの遺物が見つかっている。</p> <p>向原遺跡の発掘風景、多くの遺物が発見された。↑</p>	
	上杉時代	<p>慶長3年（1558年）上杉景勝が越後から会津に移封されてから幕末まで一貫して上杉家の支配下となった。直江兼統は越後と米沢を結ぶ越後街道の整備にあたり、その拠点集落に駅場と伝馬宿送りの制度を敷いて円滑な物資の輸送に当たらせた。市野々は宿駅として発展した。</p> <p>また、上杉鷹山の時代には、当地区にも副業として、集落ごとに特産物の生産が奨励された。</p>	
	越後街道黒沢峠	<p>黒沢峠は、平成8年（1996年）、文化庁の「歴史の道百選」に選ばれた越後街道十三峠のうちの一つである。1980年、土中に埋もれていた敷石が確認され、その後地元の有志によって発掘・整備が進められ、江戸時代の舗装道路が蘇った。</p> <p>黒沢峠敷石保存会によって江戸時代の街道が保存されている ↑</p>	
	イザベラバードの日本奥地紀行	<p>明治11年7月に「日本奥地紀行」を著したイザベラバードが、越後街道の十三峠を通して新潟側から米沢に向かう途中に、市野々に一泊している。この記述には「市野々は素敵で勤勉な部落」と記されている。</p>	

	<p>飛泉寺の大銀杏</p>	<p>600年近く前、越後村上の耕雲寺の末寺として建立された。本堂は2度の火災にあって焼失したが、境内の大銀杏は昭和53年に町の文化財に指定された樹高25m、幹回り7.1mを誇る巨木である。 当初の位置ではダム湖に水没するため、平成18年12月に100mほど山側に移植された。</p>	 <p>↑ 移植作業中の大銀杏</p>
	<p>飯豊山岳信仰</p>	<p>東部地区の旧滝集落からも飯豊山への信仰登山道があり、集落内に「飯豊山石碑」が2基ある。</p> <p>西滝にある追分石をかねた飯豊山石碑 →</p>	
	<p>民話</p>	<p>この地域には数多くの民話が記述としても残っているのが特徴的である。しかし、民話を語る語り部が跡絶え、継承者の育成が課題となっている。</p>	
	<p>祭り</p>	<p>各集落での祭りのほかに、東部地区では合同の盆踊り大会やふるさと祭りが実行委員会の企画運営によって行われてきたが、最近では合同の祭りは行われていない。</p>	
	<p>年中行事</p>	<p>昔からの年中行事が全て行われている訳ではないが、現在でも主だった行事は受け継がれている。具体的な時期や内容については文献等にきちんと残されており、再現は可能となっている。</p>	
<p>ダム工事に伴う関連インフラ整備等</p>	<p>道路整備の進展</p>	<p>主要地方道川西小国線の付替によって町中心部との時間距離が大幅に短縮されたほか、町道横川ダム湖岸線などの整備が進んだ。</p> <p>新しく町中心部と結ばれた主要地方道川西小国線 →</p>	
	<p>集落や農業施設等の環境整備</p>	<p>水源地域の生活産業基盤の整備と地域の活性化を図るため、合併浄化槽の設置や農業用排水路、集落道の整備、さらに水源の郷交流館の建設などが行われた。</p> <p>水源の郷交流館 →</p>	
	<p>ビオトープ</p>	<p>ダム貯水池上流の津川橋付近でトンボ池、ドジョウの水路など、地元の小中学生などが参加して自然観察会やビオトープ整備が行われている。一帯は「叶水ふれあい生物村」という名称で約3haの面積を有している。</p> <p>叶水ふれあい生物村での観察会 →</p>	



	情報インフラ	<p>ダム堤体及びダム湖を管理していくために敷設された光ファイバーを活用して、周辺の携帯電話不感エリアの解消を、全国初のケースとして実施した。</p> <p>光ファイバーを利用した携帯アンテナの設置 → </p>
	ダムサイト	<p>管理所のほか、インフォメーション・展示学習機能を備えた広報交流館、駐車場、展望広場が整備される。</p> <p>広報交流施設内の展示室のイメージ図 → </p>
	市野々地区	<p>飛泉寺の大銀杏を移植し、周辺を広場として整備する他、黒沢峠の敷石道から対岸の桜峠につながるルートとして「もぐり橋」が計画されている。</p> <p>周辺環境整備市野々地区の計画図 → </p>
	下叶水地区	<p>湖畔の広場として、自然草地の整備、池や河道の掘削による帯水面の拡張、並木植栽、管理用通路の整備などが計画されている。</p> <p>周辺環境整備下叶水地区の計画図 → </p>
	上叶水地区	<p>パークゴルフ場（公認 18 ホール）、ゲートボール場（2 面）、芝生広場、親水施設、湖畔の散歩道、並木植栽などが計画されている。</p> <p>周辺環境整備上叶水地区の計画図 → </p>
人口動態	人口減少	<p>昭和 35 年には東部地区全体で 1,472 人を数えた人口も、昭和 40 年に 1,280 人、昭和 60 年に 667 人、平成 17 年には 424 人まで減少してきている。（別添資料編 1-4）</p>
	高齢化	<p>高齢化率は、河原角、新股、大石沢、上叶水の集落ごとの集計では、平成 2 年に 18～35%であったものが、平成 17 年には 24～48%へと上昇している。今後も高齢化が進展していくことは間違いないが、上大石沢のように町外からの I ターン世帯の移入によって、平成 2 年より高齢化率が低下している地域もある。（別添資料編 1- ）</p>
	町外からの若い人たちの移住	<p>町外から東部地区に移住してくる若い人たちが増加傾向にあり、山の仕事や、雑穀の生産など、地域の環境を活かした特徴ある活動を展開しているケースが見られる。</p>

産業	観光わらび園	<p>観光わらび園は、町内に 11 箇所あるが、そのうち 5 箇所が東部地区に分布している。リピート率が高く、地域の産業として定着している。</p> <p style="text-align: right;">観光わらび園 →</p>	
	おいしい米	<p>地元の人たちの間でも、東部地区とりわけ新股のお米はおいしいという評判が高い。</p> <p style="text-align: right;">おいしい米 →</p>	
	つる細工	<p>食料品等を入れる籠や木の実の採取等に用いられてきた民具の一つである。アケビやマタタビのツル等を材料にし、実用品としても民芸品としても人気は高い。また、つる細工の体験講習会なども開催されて人気がある。 地域の伝統技術であるのつる細工 (白い森道先案内人パンフレットより)→</p>	
農業生産・食と料理	農業生産	<p>東部地区の農業の主力は水稻であるが、1980 年には 15,550 a あった作付面積が、2002 年には 8,102a とほぼ半減している。但し、特筆すべき点は、これまで最高で 254a だった雑穀類が、2002 年には 1,414a と大幅に増加している点である。</p>	
	自然の恵み	<p>山菜、きのこ、川魚、木の实、木の芽など山の幸、川の幸が豊で、昔からこの地域の食を支えてきた。</p>	  <p style="text-align: center;">↑自然の恵み、山菜ときのこと↑ (小国町観光協会 HP より)</p>
	郷土料理	<p>タワラ、この葉まま、ざくざく煮、きくらげの白和え、あかつき粥、とふから炒り、マスのすし、こごみのクルミ和え、みずとろろ、うどのどころ煮、あけび焼きなど地域の食材を利用した様々な郷土料理がある。</p> <p style="text-align: right;">自然の恵みを生かした多彩な郷土料理 →</p> <p style="text-align: right;">(横川ダム工事事務所：ふるさとへの想いー市野々・下叶水ーより)</p>	
学校教育	児童数の減少	<p>昭和 40 年には小学生 162 人、中学生 82 人、計 244 人いた東部地区の児童生徒も、平成 17 年には小学生 16 人、中学生 7 人の計 23 人までに減少してしまった。</p> <p style="text-align: right;">児童数が激減している叶水小中学校 →</p>	
	学校統合	<p>東部地区だけでなく、小国町全体で児童・生徒数の減少が激しいため、町教育委員会では平成 25 年度を目途に、全町の小・中学校を、統合して 1 校ずつにする考え方で調整している。</p>	

	基督教独立学園高校	鈴木粥美氏によって昭和8年に基督教独立学校として設立されたが、戦後の学制改革によって昭和23年4月に基督教独立学園高等学校として再スタートした。以来、叶水の地で、特色ある小規模高校として広く知られるようになり、全国から学生が集まって来ている。	
まちづくりに関する活動やグループ等	農林水産祭「むらづくり部門」天皇杯受賞	東部地区のむらづくりの活動が評価され、昭和58年に第22回農林水産祭の「むらづくり部門」において、天皇杯を受賞した。地区の誇りとして、昭和59年に叶水に記念碑が建立された。 叶水にある天皇杯受賞記念碑 →	
	まちづくり活動の拠点施設	昭和58年の農林水産祭天皇杯受賞につながる、東部地区のまちづくり活動を支えてきた叶水基幹集落センターは、昭和50年山村振興特別対策事業によって建設された。 叶水基幹集落センター →	
	まちづくりや環境教育、食育、観光交流などに関する活動団体	NPO法人おぐに森と水辺の会、おも白い森、白い森案内人、森林インストラクター、五穀の会などの活動に東部地区から参画している人たちがいるが、同一地区という切り口での連携や協力関係はあまり見られない。また、東部地区全体の地域づくりの推進母体は、東部地区振興協議会が担っている。	

その他、ダム水源地域の資源性については横川ダム工事事務所によって、「小国の郷風土資産マップ」が作成されており、ダム本堤や湖水橋など、ダム建設によってできた新しい人工景観を含め「横川の里八景十六勝」が選定されている。

表 2-2 横川の郷 八景十六勝

八景		十六勝			
八景の一	ダム堤体の威容	十六景の一	七曲り峠	十六景の九	桜峠
八景の二	湖水橋の麗用	十六景の二	木の谷	十六景の十	飛泉寺と大銀杏
八景の三	鐙坂の老松	十六景の三	見付山	十六景の十一	出生の滝
八景の四	丸山の山容	十六景の四	市野々街道	十六景の十二	済広寺
八景の五	火山の夕景	十六景の五	黒沢峠	十六景の十三	土尾原
八景の六	角子岬の老松	十六景の六	熊の神	十六景の十四	土尾の峰の城跡
八景の七	津川橋の麗容	十六景の七	市野々宿	十六景の十五	送り地藏
八景の八	愛宕山の遠望	十六景の八	鐙坂	十六景の十六	コウセン地藏



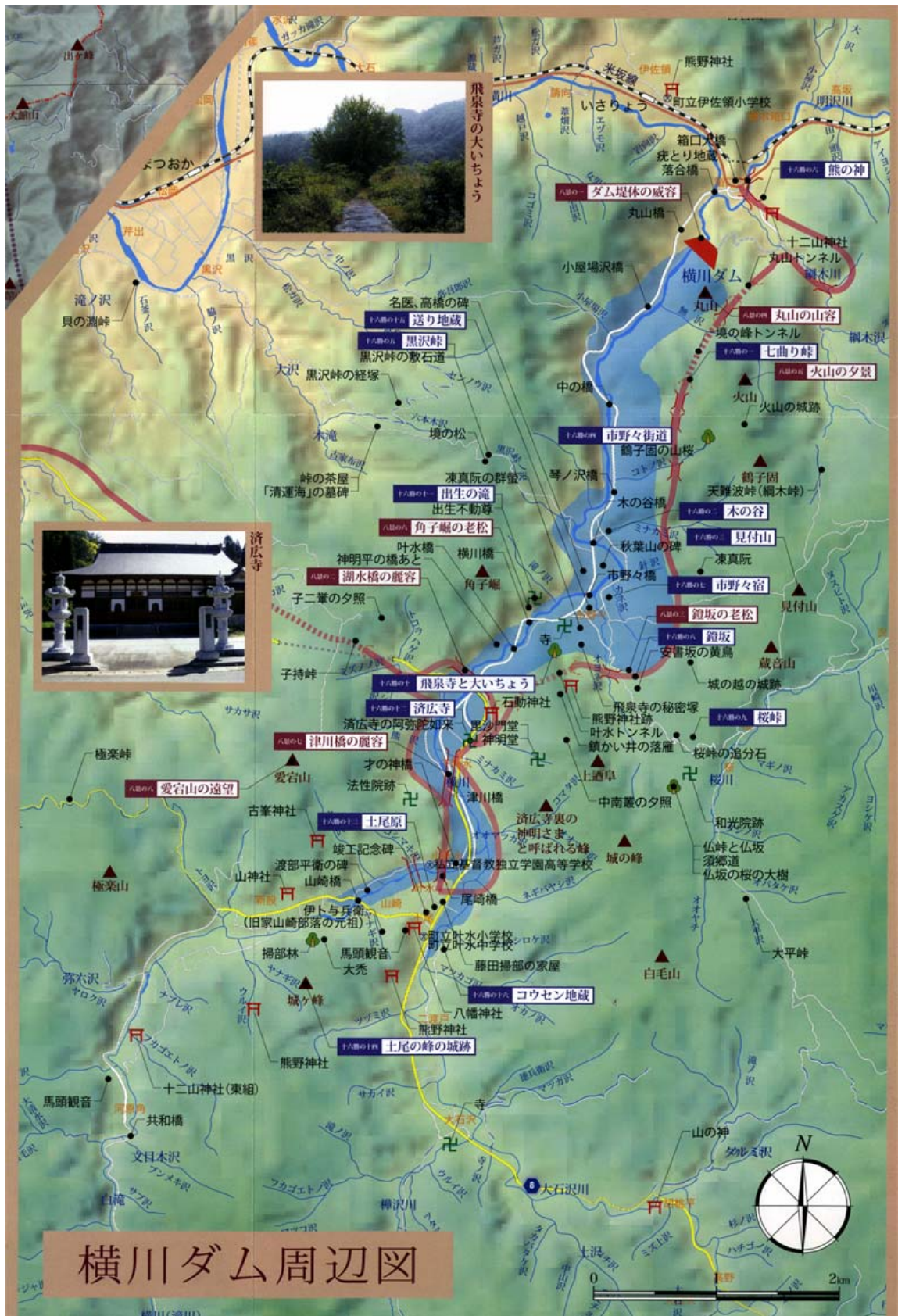


図 2-1 横川ダム周辺図と横川の里八景十六勝（横川ダム工事事務所）

## 2-1-2 ダム上流地域の集落機能の現状

近年の全国的な傾向として、農山村集落では農林業の低迷や後継者不足と高齢化、人口減少や流出による大幅な集落人口の減少、生活スタイルの変化などによって、共有地や公共施設の維持管理、冠婚葬祭や地域の祭り・行事の実施など、集落の共同体としての活動や行事の継続が困難になりつつある状況にある。

本町では、平成 18 年度に別途「農山村地域におけるムラ機能の維持・保全に関する研究」（以下「ムラ機能に関する研究」と称する）を進めていることから、本調査に関連するダム上流地域の集落の資料を抽出して、その概要を以下に整理する。

### 1) 駐在員アンケート調査結果

駐在員に対するアンケートによって、集落機能に関して問題があるとされた項目は以下のとおりであった。

(1) 現状における諸問題の発生状況（上大石沢、下大石沢、上叶水、河原角、新股、下叶水の 6 駐在区の一つ以上で問題があると回答のあったもの）

- ・森林の管理が行き届かなくなり、森林が荒れている。(3/6)
- ・水路や河川環境が変貌している。(2/6)
- ・神社仏閣等の歴史的資源が荒廃している。(1/6)
- ・山林の管理が行き届かなくなっている。(4/6)
- ・自給程度の耕作しかできない農家が増えてきている。(3/6)
- ・林業経営への意欲が減退している。(3/6)
- ・集落内で婚礼や葬儀を手伝うことが困難になっている。(1/6)
- ・祭りや伝統行事の実施が困難になっている。(1/6)
- ・集落内施設等の除雪や雪下ろしを実施することが困難になっている。(1/6)
- ・高齢者世帯の冬季の積雪に対する助け合いが減少している。(1/6)

(20 の設問のうち 1 集落でも問題があると答えられた項目は以上 10 項目であった。)

(2) 今後の集落活動の維持に関する見通し。

- ・「農作業」における共同作業。： 3/6 は維持困難
- ・「山道の補修、草刈などの山作業」： 3/6 は既に実施していないか維持は困難
- ・「道路側溝の維持管理」： 3/6 は既に実施していないか維持は困難
- ・「集落内施設や歩道などの除雪や雪下ろし」： 2/6 は既に実施していないか維持は困難
- ・「高齢者世帯の雪下ろしなど冬季の積雪に対する助け合い」： 5/6 が既に実施していないか維持は困難又はほとんど不可能
- ・「公民館や公園・空き地の掃除、草刈り、雪囲いなど」： 3/6 が既に実施していないか、維持は困難
- ・「共有地などの山林の管理」： 6/6 が既に実施していないか維持は困難又はほとんど不可能
- ・「有害動物の駆除活動などに関する共同作業・助け合い」： 4/6 がもともと実施して



いないか、既に実施していない。

・「神社・仏閣や集落の共有財産の維持管理」：3/6 が既に実施していないか、維持は困難

・「結いの精神に基づく互助活動」：5/6 が既に実施していないか、維持は困難

・「祭りや伝統行事への参加・協力」：1/6 が維持は困難

・「会合、寄り合い、集会などの開催、参加」：1/6 が維持は困難

・「集落内の婚礼や葬式における助け合い」：1/6 が維持は困難

・「ごみ置き場の清掃・管理」：2/6 が既に行われなくなったか維持は困難

・「回覧版等の行政連絡の伝達」：6/6 が比較的良好に維持、あるいはなんとか維持

(将来的に、これらの様々な集落活動の維持が困難あるいは維持できなくなると考えられる最も大きな理由は、居住者が高齢化し、体力的にも作業を負担できなくなるからであった。)

## 2) 町民アンケート（個人）調査結果

調査集計が合併前の旧町村ごとであるため、当該地区は旧津川村のデータで示すものとする。

■集落機能の維持では地区の50%以上が参加している（時々参加しているを含む）活動は、参加率の高いものから、①集落の婚礼や葬式における助け合い69.8%、②回覧板などの行政連絡の伝達68.9%、③会合、寄り合い、集会などの開催、参加61.5%、④祭りや伝統行事への参加・協力59.5%、⑤農作業に関する共同作業、助け合い53.8%、⑥山道の補修、草刈などの山作業50.8%

参加率の少ない項目は①有害動物の駆除活動などに関する共同作業、助け合い10.5%、②共有地などの山林の管理（枝打ち、下草刈りなど）17.2%、③高齢者世帯の雪下ろしなど冬季の積雪に対する助け合い20.5%、④結い（ヨイ、ヨイナシ）の精神に基づく互助活動23.2%、⑤神社・仏閣や集落の共有財産の維持管理40.8%

■特に大変だと思う共同作業・コミュニティ活動を旧町村別に見ると、農作業に関する共同作業や山道の補修などの山作業、共有地などの山林の管理は旧北小国村及び旧南小国村でより高い割合となっているが、祭りや伝統行事への参加・協力や集落内での婚礼や葬式における助け合いについては、旧津川村での割合が特に高くなっているのが特徴である。

■旧津川村では、必要と思われる共同作業やコミュニティ活動の上位は、①集落内の婚礼や葬式における助け合い、②山道の補修、草刈りなどの山作業、③高齢者世帯の雪下ろしなど冬季の積雪に対する助け合いであった。旧津川村では集落の冠婚葬祭に対する助け合いは、特に大変だと感じる一方で、必要性も、最も重要と感じているという特徴がある。

■地区・集落としての活動を維持していくためにどうすべきか？に関しては、全地

区とも同様の傾向を示し、最も多いのが「道路や公園、公共施設などの管理は行政が積極的に支援する」であり、次いで多いのが、「近隣の集落で助け合う」であった。

■住んでいる集落の魅力を高めていくために今後必要な取り組みとしては、「田舎暮らしや新規就農を考えている人の積極的な受け入れ」がトップであるが、「地区・集落の共有財産を生かした交流活動」が他の地域よりも高い割合を示し、観光わらび園などが集積する地域として、地域の資源を活かした観光・交流人口の拡大により集落を活性化させることが望まれている。

■高齢になったときに望む住まい方では、74歳以下の各年齢層とも、「小国町以外で暮らしたいという意向が旧津川村と旧小国町で高くなっている。

■住んでいる「地区・集落を良くするために必要な公共サービス」としてダム上流地域では、「就労の場や機会の充実」、「一人暮らしの高齢者の安否確認など見回り体制の強化」、「道路の除排雪の強化」、「道路の維持管理」などが上位となっている。

■町全体としての今後特に力を入れていくべきと思う分野では、旧小国町以外では、ほぼ同じ傾向で、「新しい産業おこしや起業の支援」、「休日・夜間の救急医療体制の充実」、「訪問看護や在宅福祉など高齢者福祉サービスの向上」、「道路の除雪」などが上位に挙げられている。

### 3) 町民アンケート（世帯）調査結果

町内の各世帯（世帯主）に対するアンケート調査で、主に世帯後継者の有無、農地・山林の管理状況などが中心である。

■家族構成では、旧津川村は町全体の平均値と同じ1世帯当り3.4人である。

■世帯の後継者の状況でも、旧津川村は町全体の平均値に近く、「同居家族または現在別居家族だが将来住み続けてくれる」を合わせると約32%となっている。「子供はいるが、将来この家に住むかどうかかわからない」が最も多く約44%を占めている。

■農地の所有状況と管理状況

・旧津川村では約63%の世帯が農地を所有しており、町全体の平均値である約40%を大きく上回っているが、80%を超える旧北小国村や南小国村よりは少ない。

・農地面積では水田が平均278アールと畑が7アールで、水田では町全体の平均より60アールほど少なく、畑は逆に最も多い。

・農地の管理状況は、「自家で耕作している」が41%で最も多く、「大半を貸している」が次いで多く29.1%である。「大半は荒れたまま」が9.4%あった。町全体の平均値と比較すると、自家で耕作している人が多く、貸している人はやや少ない。

・半数以上の世帯が山林を所有者しているが、旧北小国村や南小国村と比較すると2割ほど少ない。

・山林の世帯あたりの所有面積では5haと、旧北小国村に次いで多いが、「自家で適

切に管理している」世帯は、40%弱と旧北小国村や南小国村より少なく、「放置している」が36.4%あって、町内で最も高い比率となっている。

・所有する農地や山林の鳥獣被害の状況では、半数以上が無回答と「わからない」であるが、旧津川村では「ひどくなっている」は12%強で、「被害を受けていない」方が20%を超えている。一方、旧南小国村では35%が「ひどくなっている」と答えており、地域差が大きい。

### 2-1-3 個別ヒアリング調査結果

本調査では、特にダム上流地域の在住者、ダム上流域の出身者で町内在住者、ダム湖に沈む集落出身者で現在も町内在住者の30代の若い人たち7名にインタビューによるヒアリングを行った。内訳と結果概要は以下のとおりである。

1) 東部地区振興協議会が昭和60年3月に発行した、第22回農林水産祭「むらづくり部門」天皇杯受賞記念誌『東部地区のむらづくり』に、作文が掲載されていた当時叶水小中学校の児童・生徒だった方。：男性2名、女性2名

- ・全員がこの生まれ育った東部地区が好きで、良いところだと感じている。
- ・子供を自然の中で育てたかったため小国に戻ってきたが、自分たちの子供にも小国町に住みつけて欲しいとは考えていない。
- ・子供の頃と大きく違っている点は、道路や上下水道などのインフラが整備されたことで、街中での生活とあまり差がなくなってきた。
- ・各集落の人口が減少して、祭りなども活気がなくなっている。
- ・集落の共同作業も、高齢者が増えて若い人に負担がかかるようになってきている。
- ・地域がまとまってまちづくりの活動を行うことは、まだダム計画時の賛成派と反対派との分裂のわだかまりが残っているため、一つになることは困難と思われる。
- ・叶水の基督教独立学園とは今後もお互いに協力し合っていく必要がある。
- ・市野々の飛泉寺の大銀杏は、遊んだり実を拾ったりした子供のときの思い出に残るシンボルである。
- ・新股でできる米は非常においしい。やはりこの地区は農業を大事にすべきだと思う。
- ・昔と比べて休耕田が目立つようになってきた。
- ・ダム周辺の利活用や活動については、以下の提案があった。
  - ア.都会の子供と地元の子供たちが交流できる場づくりができればいいと思う。
  - イ.子供を遊ばせることができる公園を作してほしい。
  - ウ.地区の基幹産業を育て、ダムを訪れた人たちに提供できる体制作りが必要と考えられる。
  - エ.白川ダムのように、人が集まってきて楽しめる場となるようにしてもらいたい。
  - オ.ダム湖や湖畔を利用した活動を、東部地区の人たちだけで取り組むのは難しいのではないか。

2) 叶水小中学校の卒業生。現在町内在住で、定期的集まりを持っている方たち：男性1名、女性2名

- ・人口が減って、特に運動会なんかの時は寂しく感じる。
- ・道路が良くなって通勤が大変楽になった。
- ・集落の共同作業などは高齢者が中心で大変である。



- ・最近若い人たちが転入してくることがきた（ほとんどが基督教独立学園の卒業生つながりのつてが多い）が、地域との共同意識はあまりなく、積極的に関係は持ちたがらない。
- ・叶水に移転してきた若い人たちも、地域との関係は薄く、町内でも地域外の人たちとのつながりの方が多い。（趣味や仕事の関係）
- ・新しく転入してきた若い人たちともっとコミュニケーションが取れて、協力し合えればよいと思う。
- ・行政にとっては叶水の集落は何かと問題が発生するところで、他の集落と比べて、関係性はあまりよくない。
- ・箱物は要らない。水の郷も賛否両論で、地域がまとまって目的をもって運営しているわけではない。今はほとんど営業していない。
- ・グリーンツーリズムなどを広げていく。
- ・雑穀などをウリにして人を呼ぶ。
- ・ダムの話が持ち上がってからは、やはり住民同志がギクシャクした。まちづくりに対する活動もあまりしなくなったと思う。
- ・東部地区連絡協議会も、結局高齢化してきて、若い人が後を受けて引っ張る状況にない。
- ・基督教独立学園は、コミュニケーションを持っている人には身近に感ずるし受け入れられていると思うが、そうでない人には、全く別世界と考えているのではないか？
- ・小中学校の運動会に参加したり、田植えや稲刈り休みというのがあって、生徒は1日授業を休んで、地域の農家の手伝いを行った。
- ・雪下ろしの手伝いも行った。
- ・地元に住んでいたものにとっては、生れたときからあったし何も違和感は無かった。
- ・今でも先生のうちに遊びに行ったりしている。
- ・学園が携帯電話のアンテナ設置を反対した時には、かなり地域住民は怒った人が多かった。そういうギクシャクした関係は結構あるかも知れない。
- ・3人のうち2人が同学園の卒業生。